サシャ・ギトリと病

永　井　典　克

1　スペイン風邪当時のパリ演劇界

100 年前のパンデミックであるスペイン風邪が世界中で猛威を振るい、死者数が増加しつづける間でもパリ演劇界は、ほぼ通常通りの営業を続けていた。オペラ・コミック座 Opéra-Comique では『フィガロの結婚』*Les Noces de Figaro* や『カルメン』*Carmen* が、ポルト・サン・マルタン座 Porte-St. Martin では『シラノ・ド・ベルジュラック』*Cyrano de Bergerac* などが上演されていた [1]。

しかし、スペイン風邪はパリ演劇界に全く影響がなかったのだろうか？　演目、セリフなどにまったく変化がなかったのであろうか。

例えば、1919 年、スペイン風邪が大流行しているパリのヴォードヴィル座 Vaudeville ではサシャ・ギトリ Sacha Guitry (1885-1957) 作の『パスツール』*Pasteur* が上演されていた。ルイ・パスツールは言うまでもなく近代細菌学の開祖とされる人物である。彼は感染症の原因が微生物であることを発見し、また病原体を弱毒化し接種するワクチンを開発し、予防接種の基礎を築いた [2]。医者がスペイン風邪の患者にラム酒を処方するしかなかった時 [3]、ワクチンを開発し、予防接種の基礎を築いた人物をサシャ・ギトリが主題として選んだことに、スペイン風邪の影響はなかったと言えるのだろうか。

実は、この点に関しては、後述するようにサシャ・ギトリはスペイン風邪の流行より前にパスツールを取り上げることを考えていたため、作品制作に取り掛かる段階ではスペイン風邪の影響はなかったと（若干の留保はあるものの）考えてよい。

だが、作品を準備する段階、上演される段階ではどうだろうか。猛威

を振るっていたスペイン風邪の影響はまったくなかったのであろうか。

そこで、この小論では、20 世紀前半のフランスを代表するヴォードヴィル劇作家にして、演出家、役者、映画監督であったサシャ・ギトリという人物を取り上げ、スペイン風邪がパリ演劇界に影響を及ぼしたのか、及ぼしたとしたらどのような形で現れたのかについて、考察をすることにしたい。特にサシャ・ギトリは、生涯、病気に苦しめられていたため、病気には常に意識的な人物であった。スペイン風邪に対して、反応を示していたとしてもおかしくはない。さらに、彼の病気一般に対する意識は、演劇人としてのものであった。スペイン風邪のようなパンデミックがパリ演劇界に影響を与えたとするならば、サシャの反応は全ての演劇人に通用すると言わないまでも、かなり典型的なものであったはずである（サシャの反応が、どの程度まで典型的な演劇人の反応であったかはさらなる調査が必要である）。

演劇人としての病に対する反応というのは次のようなものである。まずサシャは病を話題にしたとき、演劇人であるならば舞台中に倒れ、役者の化粧をしたまま死んだ 17 世紀の喜劇作家にして役者であったモリエールを羨まない人はいないだろうと言っている。そして、そのような演劇人の例として、やはり俳優であった父親リュシアン・ギトリ Lucien Guitry (1860-1925) の名前を出す。リュシアン・ギトリという俳優が病気であったときの対応が演劇人的であると言うのだ。ある朝、リュシアンは目覚めたときに 38 度の熱があると気づいた。医者がすぐに呼ばれて、咳止めシロップ、吸玉、野菜スープが処方される。二日間は野菜スープ以外は何も食べてはいけない。医者は俳優にベッドから出ないようにと命じるが、俳優は今晩、芝居に出なければならないと返事をする。医者は怒り、馬鹿は治せないと言いながら出ていく。午後 7 時になると熱が 39 度に上がっている。俳優は羊毛のセーターを 2 枚着込み、マフラーをつけ劇場へと向かう。彼は舞台に立つが、観客は俳優の病に気がつくことはない。真夜中、帰宅すると熱は 37 度 8 分に下がっている。俳優にとっては、舞台上での 3 時間がなによりの薬となったのだ。

私たち俳優は病気のときでも、9時5分ごろには、病気ではない別の人間の体に入り込めるという特権を持っている。風邪に休憩を与えることになるこの3時間は、俳優の体から風邪を追い払うことができるのだ。

千人の観客が私達に耳を傾ける。これ以上の聴診はない！

千人の観客が手を叩いてくれる。これ以上に効果的なマッサージはない！

千人の観客が、そこにいて、称賛し、「また明日の晩に！」と言ってくれる。なんという長寿の薬だろう！

サシャ・ギトリ『劇場万歳[4]』

俳優は病気の時でも、観客に病気を隠すことができるのならば、演じなければならないとサシャは続ける。病気を隠すことも俳優が演じなければならない演技なのだ。当時の演劇人は衛生学とは無関係に生きているかのようである。

さて、この結果、医者はリュシアンに「あなたは、自分で健康だと思っているだけです」と言った。「自分で健康だと思っているだけの人」は原文では un bien-portant imaginaire となっているが、これはモリエールの『病は気から』の原題 *Le malade imaginaire*、つまり「自分が病気だと思っているだけの人」のもじりだ。モリエールの喜劇では、健康な主人公が自分は病気だと思いこむ姿が描かれていたが、医者は、病気のリュシアンが自分は健康だと思いこんでいると指摘したのである。それでも、俳優は劇場に行くことで健康になるとサシャは主張していることになる。

劇場に行くことで健康になるのは役者だけではない。観客もまた健康になるとサシャは考えていたようだ。スペイン風邪が大流行する直前の1918年の戯曲『ドゥビュロー』*Deburau* では、鬱病になった主人公のパントマイム役者ドゥビュローに医者が気晴らしのために、芝居を観に行

くべきだと助言をしている。「他人を笑わせることができる人は、人々に恩恵をあたえているようなものです。医者にはできなかったことができるわけですから」と医者は劇場の効能を述べる[5]。

演劇人は舞台に立つことで、観客は舞台を観ることで、健康になる。そして、演劇人は病気でも、できるだけ舞台に立たなければならない。演劇人が舞台で死ねることは幸運である。演劇人ならば誰もがそう思うはずだとサシャは言うが、彼がそのように言語化するのは、まさに彼が病に苦しみ続け、病のことを考え続けた結果でしかない。

2　サシャ・ギトリの生涯[6]

サシャ・ギトリは俳優リュシアン・ギトリの息子として1885年ロシアのサンクト・ペテルブルクで生まれた。リュシアンは名女優サラ・ベルナール Sarah Bernhardt とも多く共演し、ジョルジュ・フェドー Georges Feydeau、トリスタン・ベルナール Tristan Bernard、ジュール・ルナール Jules Renard らの劇作家・文人と親しく付き合うなど19世紀フランスを代表する俳優の一人であった。彼はロシア皇帝アレクサンドル3世から高く評価されており、ロシア宮廷での上演には息子をよく連れて行った。サシャ・ギトリの本名はアレクサンドル・ギトリ Alexandre Guitry であるが、これはロシア皇帝にちなんで付けられた名前であった。サシャとはアレクサンドルのロシア語による愛称である。両親は彼が生まれるとすぐに離婚している。5歳のときから舞台に立ち、生涯で139本の戯曲を書き、50年以上に渡り演劇界に君臨した。彼の作品の多くは、自分自身の経験から発想を得ている。例えば彼の作品には両親の離婚と、父親について回った巡業の影響を読み取ることができる。そして、サシャ・ギトリは、自分の作品では主演をこなすことが多かったため、サシャは自分で自分自身を演じているかのようであり、劇場に来た観客はサシャの家に招待されているかのような印象を受けた。

劇作家、俳優として人気であったため、彼を攻撃する人も多かった。

彼らはサシャ・ギトリを「自分のことしか語らないムッシュー・モア」« Monsieur Moâ » と呼び、ナルシストだと非難した。Moâ は moi、つまり「私」と音が同じであるからである[7]。結婚相手、愛人を役者として舞台に登場させ、自分の結婚生活を舞台上で演じるような彼の手法は、私小説ならぬ、私演劇とでも呼べるものであろう。作品も軽薄だと言われた。また、女性嫌いだと決めつけられた。しかし、サシャ・ギトリが女性嫌いだったという非難は正当なものではない。彼の作品では、主人公は女性を愛することができる（むしろ過剰に愛する）人物であるからだ。ただし、主人公は愛人にしか興味がない。相手が「結婚相手」となった瞬間に彼は興味をなくし、嫌悪する。この主人公の姿は、自分自身の経験を舞台にするサシャ・ギトリの姿である。サシャ自身、生涯に 5 回結婚をしている。作品中では、主人公は自分が結婚を信じることができないのは父親の影響であるとする。確かにサシャの父リュシアン・ギトリも結婚を繰り返す人物であった。このようにサシャ・ギトリを「ムッシュー・モア」であるという指摘は正しいが、それは初期の作品に限った話であり、後期に入ると犯罪物、歴史物など多様な作品を生み出している。

第二次世界大戦でフランスがドイツに占領されている時も、彼は劇場を続けた。ドイツ人たちが彼の芝居を称賛していたから可能だったことであるが、彼は更にドイツ軍と交渉し、捕虜となっていた演劇人トリスタン・ベルナールを解放させようと努めた。ユダヤ人であるというだけで逮捕されるのは不当なことであると彼は言っている。サシャ・ギトリの敵たちは、彼がドイツ軍に協力していたと非難した。戦時中のサシャの姿勢は、サシャが監督し主演した 1943 年の映画『あなたの目になりたい』*Donne-moi tes yeux* によく現れている。ナチスによって占領されている最中のパリで撮影されたこの映画は、彫刻家の主人公（サシャ・ギトリ）が展覧会に作品を出品するところから始まる。この展覧会では 1871 年普仏戦争でプロシアにフランスが敗れた時に作られた多くの作品と、1943 年進行中の占領下で作られた多くの作品が集められる。主人

公は、これらの作品を前にして、1871 年にプロシアに敗れた時にこれだけ多くの素晴らしい作品が作られた。そして今、同じような状況におかれたフランスにおいても、これだけの作品が作られている。フランスは決して変わらないと宣言するのである。なお、この作品ではデュフィ Raoul Dufy、ユトリロ Maurice Utrillo、ヴラマンク Maurice de Vlaminck らの芸術家たちがカメオ出演している。しかし、パリが解放されたとき、サシャ・ギトリはナチスに協力したとして逮捕された。結局、免訴されることにはなったが、サシャはますます皮肉屋となっていった。

彼の活動は演劇にとどまらず、1935 年『パスツール』*Pasteur* を皮切りに先述の『あなたの目になりたい』など 30 本以上の戯曲を自らが監督して映画化した。多くの作品で主演もこなした。1936 年の『とらんぷ譚』*Le Roman d'un tricheur* はオーソン・ウェルズ Orson Welles の『市民ケーン』*Citizen Kane*, 1941 のモデルとなったともされる[8]。20 世紀前半のフランス演劇・映画を代表する人物の一人と言える。

3　サシャ・ギトリ作品の特徴　結婚か愛人か、永遠か瞬間か

サシャ・ギトリの作品における「病」を調べる前に、サシャ・ギトリの前期の作品に執拗に現れる「結婚と愛人のどちらを選ぶのか」というテーマについて触れておく必要があるだろう。「結婚か愛人か」のテーマは、サシャにおいては「病」の問題と重なることになるからである。さて、「結婚か愛人か」という問題は「永遠か瞬間か」と言い換えることが可能だ。サシャは、ここで「瞬間」、つまり「愛人」のほうを選択し続ける。

例として、代表作の一つである 1916 年の『夢を見ましょう』*Faisons un rêve* を取り上げることにしよう。この作品は 1936 年には自らが主演して映画化していた。

主な登場人物は「彼」と「彼女」とその「夫」の 3 人である。「彼」は「夫」がいる「彼女」に恋をして、「彼女」を得ようとするが、「彼女」

との結婚は考えていない。

サシャ・ギトリは劇場初演時と 1936 年の映画版で「彼」を演じている。一方、「彼女」のほうは、劇場初演時はサシャの最初の妻であるシャルロット・リゼス Charlotte Lysès が演じたが、映画版では 3 人目の妻であるジャクリーヌ・ドゥリュバック Jacqueline Delubac が演じている。

「彼」の容貌に関してはト書きで「30 歳、それほどの美男子ではない。生きていることに喜びを感じ、周囲の人々に満足し、自分自身にも大変満足している。彼に職業を尋ねれば、彼は『愛を交わすこと！ Faire l'amour !』と答えるだろう[9]」と記されている。初演時にサシャは 31 歳であった。また、サシャは実際、常に喜びを感じ、自分に満足しているように見える人物であった。登場人物と作者兼役者であるサシャを単純に同一視してはならないが、彼の登場人物は基本的にサシャと同じ行動原理に従っているということは事実である。

第 1 幕で「彼」は「夫」と「彼女」の二人を家に招待する。「夫」のほうは若い女性との逢引の約束があり、帰ってしまう。「彼」は「彼女」に恋心を打ち明け、今夜会いたいと話す。さて、サシャの「結婚か愛人か」が問題になる戯曲では、登場人物が相手を口説くときに、長ゼリフを言うことが多い。この芝居でも「彼」は延々と口説くセリフを口にするが、このセリフの言い方についてト書きで指示がされている。

> この幕の終わりまで彼が彼女に言うこと、言うであろうことはすべて能弁に、また可能な限り陽気に語られなければならない。これらの台詞は、変わることがない陽気な性格の証言であるからである。エスプリのある男が話しているのではなく、陽気な男が自らの喜びのために、愛の告白を即興で語っているのである。その言葉が心からのものかと彼に尋ねれば、心から陽気なだけだと答えるであろう[10]。

サシャによって陽気に、能弁に語られる愛の言葉は現在、残されてい

る映画版で確認することができるが、この愛の言葉の結果、「彼女」は今夜、「彼」の家に来ることを約束する。

第 2 幕では、会う約束をした「彼女」が現れないため、最初、期待に満ちていた「彼」は次第に不安になっていく。「彼」は女性に対する不満をぶちまける。そして、自分が結婚することは考えられないと言う。

> 結婚！　ひどいものだろうね。恋愛以外で女性と何ができるのか、いつも考えてきたけれど。皆、それぞれだよ。結婚した男と、結婚していない男では、中国人とポルトガル人ほどの違いがあるように思えるな！　誰かが僕に「君はいつかヴェジネの路上で郵便配達人を絞め殺すだろう」と言ってきたら、「そうかもね」と僕は答えるね。誰かが僕に「君はいつかクレルモン＝フェランの大司教になる」と言ってきたら、「そういうこともあるだろう」と僕は答えるね。でも誰かが僕に「君はいつか結婚する」と言ってきたら、「いいえ、将軍閣下！」と僕は答えるよ。勿論、そう言ってきた相手が将軍だったらだけど。
>
> サシャ・ギトリ『夢を見ましょう』第 2 幕 [11]

「彼」は、「彼女」が心変わりをしたのではないかと電話する。最初は「彼女」も「彼」とやり取りしていたが、途中から、「彼女」は何も言わなくなる。「彼」は電話で返事をしない「彼女」に延々と話し続ける。ちなみに、この幕は、すべて「彼」の長ゼリフで構成されており、「彼女」の返事を観客は聞くことはできない。最後に「彼女」が彼の部屋に現れ、二人が抱き合う場面で第 2 幕は終わる。

第 3 幕は、次の日の朝、寝過ごして朝まで「彼」といたことに気づいた「彼女」がパニックになるところから始まる。「彼女」は、「夫」が帰宅するまえに自宅に戻るつもりだったのだ。「彼」は、動揺する「彼女」に、結婚して一生 toute la vie 一緒にいればよいではないかと、その場しのぎの発言をする。

そこに「夫」がやってくる。「彼」は「夫」が自分を糾弾しに来たと思い、「彼女」を隣室に避難させる。しかし、事情を聞いてみると「夫」も昨夜は愛人と過ごしていて、家に帰っていなかったと分かる。「夫」は親友であると思っている「彼」に、「彼女」への言い訳を考えてほしいと頼みに来たのだ。安心した「彼」は、オルレアンに住む叔母さんの調子が悪く、見舞いに行ったことにするようにアドバイスする。二日間はオルレアンで過ごし、叔母の調子が良くなったと言って戻ってくれば良い。「夫」はこのアドバイスに大喜びして、オルレアンに向けて出発する。

「夫」がいなくなったと知った「彼女」は喜ぶ。「彼」と一生一緒にいられると思ったのだ。しかし、「彼」は一生よりも良いものがあると答える。「彼女」は一生一緒よりも良いこととはなにかと尋ねる。すると「彼」は、「二日間一緒にいられるんだよ！」と宣言するのだ。

映画版は喜ぶ二人がここで抱き合う場面で終わる。ところが、もとの劇場版では、異なる展開をしていた。「彼女」は「彼」のこのセリフで、相手が求めているのが一生 toute la vie ではなく、時間の限られた恋愛関係という夢でしかないと知り、ショックを受ける。そして、映画版では割愛された第 4 幕では、二日間が終わり、「彼女」が「彼」のもとを去る場面が描かれている。「彼女」は「彼」に二度と会うことはないという手紙を書く。しかし、最終的には「彼女」も「彼」の主張したように短い時間の夢を楽しもうと思い直す。『夢を見ましょう』は、サシャの前期の代表作であると同時に、前期の作品群の原型ともいうべきものとなっている。そして、ここには一生、結婚によって縛られるよりも、二日間の愛人関係のほうが望ましいというサシャの価値観を読み取ることができるのだ。

4　サシャ・ギトリと病

「永遠か瞬間か」という問題は、サシャ・ギトリと病について考察す

るときに、重要な視点となる。サシャは、子供の時から延々と自己免疫疾患の一つであるリウマチに苦しめられていたからである。1914 年にはリウマチが悪化し、死を覚悟するほどの重篤な状態に陥っていた。彼は病とながく付き合っていたため、1932 年には『私の医者たち』*Mes Médecins* を出版し、自分の病と医学に関する見解を披露している。この序文で、サシャはまず自分は「医師たちには好意を持っている」と弁明する。しかし、そのうえで、「馬鹿な医者、うぬぼれの強い医者、シャルラタン、不器用な医者、頑固な医者、偏執狂的な医者」に出会ったことがあると述べる。勿論、この患者にとっては致命的になりうる職業を遂行するに値しない人物に出会ったことはほとんどない。「数学者のうっかりミスは笑ってすまされる」が、外科医のうっかりミスを笑うことはできないため、「下手な画家よりも下手な医者の数は、幸いなことに少ない」からだ[12]。

サシャは、この数は少ないものの致命的に恐ろしい医者に出会ったときの経験を語る。彼は 1904 年にノルマンディー地方のサン＝ヴァレリー＝アン＝コーで夏を過ごしたが、そこで体調を崩し、医者を呼ばなければならなかった。「この土地で最高の医者」は大変なお年寄りで、処方箋を書くときに、薬剤師に調合させる薬の名前を思い出すのに苦労する。薬の分量に関してもはっきりせず、最初「30 センチグラム」と書いたが、1 分ほど考え、数字の 3 の開いたカッコを閉じ 8 にした。サシャは、医者が処方箋にサインしたとき、決して処方された薬を飲まないと決意した。それは死を意味していたからだ[13]。

このようにサシャは医師の中には不器用な人物がいるため、医師をまるごと信頼はしていなかった。だが、彼は科学にはほぼ絶対的な信頼をおくべきだと考えていた。どのように病人としての自分の生涯は終わるだろうという問題について考えるとき、彼は病気による死は不当なものだと言う。それは科学の敗北を意味するからだ。科学は敗北してはいけない。そのため、老衰による死だけが、彼にとって許容できる死であった。彼は 1 分たりとも、人生を短くすることに反対した。その最後の 1

分に、癌の治療法が見つかったという科学の勝利の知らせを受けるかもしれないではないか。サシャは、そのようなことが起きたとするならば、その時、「なんと良い死を私は迎えることになるだろう」と考えるのである[14]。

ここで最初の問題に戻ろう。当時の演劇界を代表する人物の一人にして、病気による死は科学の敗北であると考え、1分でも長く生きることを望んでいたサシャ・ギトリは、多くの人たちが倒れていくスペイン風邪という状況に、どのような反応を示したのだろうか。

5 『パスツール』、『私の父は正しかった』

スペイン風邪がフランスで大流行を始めた1918年12月、エドモン・ロスタン Edmond Rostand という19世紀フランスを代表する戯曲家がスペイン風邪で亡くなっている。ロスタンの代表作『シラノ・ド・ベルジュラック』では、大きな鼻という容姿に悩みながら、一人の女性を思い続けるシラノの姿が描かれている。そこでは大きな鼻と同時に、帽子の羽飾り panache が重要なキーワードとして登場するが、その結果、シラノは大きな鼻と羽飾りをもつことになり、フランスのシンボルである鶏と類似性を持つ存在となっていた。ロスタンは『シラノ』の大成功のあと、立て続けに鳥に関係がある芝居を書いた[15]。その一つにまさに鶏たちが登場人物である『シャントクレール』*Chantecler* があった。サシャの父リュシアンは、この芝居で主役の鶏シャントクレールを演じていた。サシャ自身、リュシアンを通してエドモン・ロスタンという国民作家に会ったことがあったし、実際にサシャの手によるロスタンの映像が残されている[16]。このロスタンの死があるため、サシャがスペイン風邪に無関心であったとは考えにくい。

さて、1918年は、サシャにとって重要な年であった。この年の3月7日に、父リュシアン・ギトリがヴォードヴィル座で『ドゥビュロー』*Deburau* を上演中のサシャ・ギトリを訪れてきて、息子に「戯曲を書い

てほしい」と告げた。この親子はながいこと仲違いをしており、1918 年は父と息子の和解の年となったのだ。

サシャは、依頼された戯曲は「もう始めている」と答えた。彼は 2 年前からパスツールを舞台に載せるという構想を持っていたが、この計画は「このような人物を体現する役者を選ぶことが困難で中断していた」のだ[17]。

スペイン風邪がフランスで猛威を振るうのは 1918 年後半からであり、芝居そのものの構想はその 2 年前からあったというサシャ・ギトリの証言からも、『パスツール』はスペイン風邪に触発されて作成された戯曲ではないと言えるだろう。しかし、この彼の証言をそのまま事実として受け取るべきかどうかについては慎重であるべきだ。戯曲と実生活を行き来する彼の作品は、どこまでが事実でどこからが創作か分からないからである。例えば 17 世紀の寓話作家ジャン・ド・ラ・フォンテーヌを主人公とする 1916 年『ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ』*Jean de La Fontaine* では、主役のラ・フォンテーヌをサシャ・ギトリ本人が、ラ・フォンテーヌ夫人を当時の妻シャルロット・リゼス、ラ・フォンテーヌの愛人をイヴォンヌ・プランタン Yvonne Printemps が演じている。1918 年にサシャはシャルロットと別れ、イヴォンヌと結婚することになるため、観客は、舞台上にラ・フォンテーヌとその妻と愛人の物語だけを見ていたのではなく、サシャと妻と愛人の姿も見ていたことになる[18]。物語と現実の境目は極めて曖昧である。作者が「自分」のことしか語らないナルシストだと非難されたのも無理はない。

また劇作家が主人公の『トア』*Toâ* という作品では、主人公の劇作家は愛人との揉めごとをほぼそのまま舞台に乗せている（彼の居間も忠実に再現されている）。劇中の芝居の上演中に、当の愛人が客席から乱入し、劇作家が「現実とフィクションを混同している」と非難する。劇作家は「画家が妻をモデルにするようなもの」で事実をそのまま描いているのではないと答える。画家はモデルの鼻が曲がっていれば、「まっすぐに描く」ではないか。それと同じことだと言うのだ[19]。

『パスツール』にしても、「このような人物を体現する役者を選ぶことが困難」なためリュシアンという名優が現れるまで中断していたはずの作品なのだが、サシャは後に自らがパスツールを演じて映画化している。

さらに例を挙げるならば、リュシアンとの共同作業の作品の一つとして『俳優』*Le Comédien* という作品がある。ここでリュシアンは、老いた名優を演じている。古い友人が現れ、自分の姪が俳優のことを愛してしまったので、彼が化粧のない本当の姿（かつらを取った禿頭の姿）を見せてくれれば、姪も夢から覚めるだろうと言ってしまった。腹を立てた老俳優は正装し、友人の姪を口説き、愛人にする。実生活のリュシアンも、サシャと同様に愛人を次々に取り換えていく人物であると知っている観客は、この作品でも創作上の主人公を見ているのか、実際の俳優リュシアン・ギトリを見ているのか、分からなくなるのだ。『俳優』は後に映画化されたとき、「息子によって語られるリュシアンの生涯」と副題がつけられ、本編の前後にリュシアン・ギトリの伝記が付けられた。サシャが『俳優』で描いた俳優の姿は、どこまでも実際のリュシアンの姿のように映し出されている。

もともとリュシアンとサシャの 14 年に渡る仲違いの原因の一つは、サシャの最初の妻シャルロット・リゼスの存在だとされた。彼女は劇作家トリスタン・ベルナールらと知り合い、女優としてデビューしたとき、リュシアン・ギトリの愛人となっていた。その後、彼女は 7 歳年下のサシャと出会い、彼らは恋に落ち、結婚したのだ[20]。リュシアン、サシャ親子の関係は、複雑で面倒なものであった。サシャはこの面倒な実生活を劇作に反映させているため、どこまで「曲がったモデルの鼻をまっすぐに描いた」かを見極めることは極めて困難なことである。

話をもとに戻すと、リュシアンと和解する 2 年前から『パスツール』を企画していたというサシャの発言もどこまでが事実で、どこまでが創作かは分からないということになる。事実としてあるのは、1919 年にサシャはリュシアンと和解して『パスツール』を上演し、その後、彼らが 1919 年『私の父は正しかった』*Mon père avait raison*、1920 年『ベ

ランジェ』*Béranger*、1921 年『俳優』*Le Comédien*、1921 年『大公』*Le Grand Duc*、1921 年『ジャクリーヌ』*Jacqueline* と続けて共同作業を行ったということだけである。

スペイン風邪はフランスでは 1918 年後半から 1919 年にかけて猛威を振るったので、サシャの作品にスペイン風邪の影響があるとするならば、まさにリュシアンと和解しているときに、リュシアンを主人公として作成され、上演された数編の作品に現れている可能性が高いだろう。

そこで、ここでは『パスツール』、『私の父は正しかった』の 2 作品を調査することにしたい。

さて、サシャの作品では先述したように、現実とフィクションが渾然一体となっているが、作品群としては彼の個人的な経験に基づく作品（個人史作品）と、歴史的出来事を扱った作品（社会的歴史作品）の 2 つに大別することが可能である。

まず 1919 年の『パスツール』は、ワクチンの生みの親であるパスツールを題材としているため社会的歴史作品と位置づけることができるだろう。1920 年『ベランジェ』も、19 世紀のシャンソン作者ベランジェを主人公にし、ナポレオンの失脚から、シャルル 10 世の反動政治、1830 年の 7 月革命、1848 年の 2 月革命までを描いているため、歴史作品と言える。なお、後期の作品には、歴史作品が多く、1953 年『ヴェルサイユ語りなば』、1955 年『パリ語りなば』*Si Paris nous était conté*、『ナポレオン』といった映画作品を彼は残している。ただし、社会的歴史を扱っているときでも、現実にフィクションが混じりこむことも多い。一例を挙げれば 1937 年の『王冠の真珠』*Les Perles de la Couronne* は、カトリーヌ・ド・メディシスからスコットランドのメアリー女王、そして英国のエリザベス 1 世へと渡ったとされる王冠の真珠について、歴史的出来事と同時に、まだ見つかっていない真珠を作家本人が見つけるまでをフィクションとして語っている。また、『ヴェルサイユ語りなば』、『パリ語りなば』にしても、原題を直訳すれば『もしヴェルサイユが私に語られたならば』、『もしパリが私達に語られたならば』であり、単なる歴史作

品ではなく、サシャが個人的に興味をもった話題が中心に語られているのである。『ヴェルサイユ語りなば』では、サシャが演じるルイ 14 世の正妻と愛人についての話題が半分を占めている。その意味では、サシャの歴史的作品は限りなく個人史作品に近い。

逆に『私の父は正しかった』は、父親リュシアンを題材としているため、『夢を見ましょう』など前期のサシャの作品に多く見られる純然たる個人史作品と位置づけられるだろう。

このスペイン風邪直後に作られた社会的歴史作品『パスツール』と、個人史作品である『私の父は正しかった』に、病への言及が見られるのである。

まず『パスツール』だが、映画版において、サシャ本人がパスツールは、ナポレオンに並ぶフランスの英雄であると解説している。この作品では、新しいワクチンという治療法が医学界に受け入れられず苦労したパスツールが、大統領自らによってフランス国民は彼に感謝している、彼がいなければ多くの人々が死んでいたであろうと言われるまでが描かれる。共和国大統領はうやうやしくパスツールに腕を貸し、二人はソルボンヌの大講堂の開いた扉へと進んでいく。彼らが敷居をまたいだ瞬間、フランス国歌が鳴り響き、「パスツール万歳！」という大歓声が聞こえるという場面で幕は降りる。

このようにパスツールは最終的には聖別化されるが、当初、彼の考えは受け入れられていなかった。パスツールは懐疑主義を嫌悪している。それは、疑う人間は彼の仕事を邪魔するからであった。そして、彼の研究する細菌の存在を疑い、彼を攻撃したのは、医学アカデミーの医師たちであった。パスツールは医師たちに次のように反論する。

パスツール：

ああ！　医師の皆さんは、細菌にかんして懐疑的であられる！　微小な生物は皆さんに滑稽なものに思えるのですね！　しかし、何

がなんでも、認めていただかなければいけません！　誰が私を最も攻撃するかご存知ですか？　医師の皆さんです。私が医師でないという理由でね！

【中略】

あなた方は私を黙らせることでしょう！　あなたたち医師は殺菌を信じていなかったのにです！　手術を始める前に、器具を火で炙るように私は医師たちに懇願しなければならなかったのにですよ！私はいつも誰かを救ったばかりだという様子をしている医師たちが好きではありません。往診を終えた瞬間に患者が苦しまなくなると彼らは思っているのです！

サシャ・ギトリ『パスツール』第 2 幕[21]

しかし、パスツールは「科学と平和は無知と戦争に必ず打ち勝つ」（第 5 幕）という信念を持ち続け、レジオンドヌール勲章を授かり、アカデミー・フランセーズ会員に選出され、大統領から感謝されるに至る。言うまでもなく、このパスツールの医師たちへの不信感と科学への信頼は、サシャ自身のそれと重なる。この戯曲は、1932 年『私の医者たち』にも見られた「科学は病に打ち勝つべきだ（必ずしも医師が打ち勝つのではない）」という、病に苦しめられてきたサシャの科学への信仰告白とも言うべき作品なのだ。この点において、『パスツール』は歴史作品ではあるものの、極めて個人的な作品であったと言える。サシャが 1935 年に映画製作に乗り出した時、最初に選ばれた作品がまさに『パスツール』であったことからも、この作品への作者の思い入れが理解されよう。この作品にはスペイン風邪を直接に示唆するものがない。それは、この作品が、サシャの個人的作品であり、本質的に社会的出来事と無縁の作品であったからなのかもしれない。

ただ、観客もこの戯曲においてスペイン風邪の影響があるとは見ていなかったようだ。最初に述べたように演劇界はスペイン風邪とは無関係に通常運転であった。フィガロ紙 *Le Figaro*（1919 年 1 月 27 日）は、一

面トップで『パスツール』初演の記事を載せているが、そのタイトルは「女優がいない！」というものであった。サシャは『パスツール』において、女優を除外し、恋愛を一切扱わないという野心的な試みをしていたのである。評者はこれをこれまでのヴォードヴィルの規則を破るものだと問題にしている。観客は、『パスツール』を、リュシアンとサシャ親子の和解の作品、そして女優・恋愛を除いたサシャの野心作として見ており、現実のスペイン風邪とは結びつけて考えることはなかった。

1919 年の『私の父は正しかった』は、1899 年から 1919 年までの 20 年に渡るアドルフ、シャルル、モーリス親子三代の物語を描いている。1899 年が舞台の第 1 幕では、祖父アドルフをリュシアン・ギトリ、その息子シャルルをサシャ・ギトリが演じ、20 年後が舞台の第 2 幕以降では、50 歳となったシャルルをリュシアン・ギトリ、成人した孫のモーリスをサシャ・ギトリが演じている。1919 年、サシャは 34 歳、リュシアンは 59 歳であり、サシャは、シャルルとアドルフの関係に、実際のリュシアンと自らの関係を重ね、個人史的作品としてこの喜劇を書いたと言える。

第 1 幕では、シャルル（サシャ）が息子のモーリスを寄宿舎に入れようと考えていたところ、妻が家を出ていったため、息子を一人で育てることを決意するまでが描かれている。シャルルの父アドルフ（リュシアン）は、シャルルに人生を楽しむことを助言するが、彼は父の助言を聞こうとしない。

第 2 幕では大人になったモーリス（サシャ）に恋人ができるが、彼は父を見捨てていった母のため、女性全体に不信感を抱いており、結婚に踏み切れない。シャルルは女性に関する教育の失敗を正そうとし、モーリスと恋人が旅先で合流できるように取り計らった。そして、旅行から戻ってきたモーリスは無事恋人と結ばれていた。

その間に変わったのはモーリスだけではなかった。父シャルルも、20 年前の自らの父アドルフの助言を思い出し、人生を楽しもうと考えるよ

うになっていた。シャルルは楽天的な自分の父の影響が息子に及ばないように努力していたが、自分自身は影響を受けていることに気づいていた。「人生を楽しむべきだ」という父アドルフの言葉は、今では良識に満ち、真理だと思えるようになっていた。シャルル（リュシアン）は息子モーリス（サシャ）に、自分が父から受けた助言を繰り返す。妻や母に捨てられたからといって、愛することを恐れることはない。恐れることは「周りの人の死」だけで良い。人生には可能性があるので、信用すべきだし、楽しむべきだと。

シャルル：

私もおまえのようだった。おまえも私のようになるだろう。おまえのお祖父さんは正しかった。私がおまえのお祖父さんと同じように考えるようになったように、いつかおまえも私と同じように考えるようになるだろう！　でも、急ぐことはない。今、おまえは愛しているし、愛されてもいる。幸せになるがよい。幸福に身を委ねるがよい！　愛することは深刻なものだとおまえに言ったとき、私は嘘をついていた。嘘だったんだ。周りの人の死以上に深刻なことなどない！　彼女を信用しろとは言わない。でも、人生は大いに信用すべきだよ。人生には無限の可能性があるのだからね！

サシャ・ギトリ『私の父は正しかった』第3幕[22]

息子モーリス（サシャ）は、祖父から父（リュシアン）へと受け継がれた教えを受け入れる。この作品はサシャがリュシアンを受け入れ、親子の和解が成立したこと、同時にサシャ自身が女性への不信を乗り越えたこと（サシャは1919年に名女優サラ・ベルナールと劇作家ジョルジュ・フェドー、トリスタン・ベルナール、そしてリュシアン・ギトリが立会人となり、イヴォンヌ・プランタンと結婚している）を印象づけるために書かれたものである。その2年後には『俳優』で、禿頭で、友人の姪を口説く父リュシアンの姿を描いているし、結婚相手のイヴォン

ヌ・プランタンは1931年にはサシャを裏切ることになるのだが、この時点では確かにサシャとリュシアンの親子が和解し、サシャの結婚への恐れも無くなったのだと観客は考えた。雑誌『笑い』*Le Rire* の1919年10月15日号の『私の父は正しかった』の劇評によれば、この喜劇は「ギトリ一家の家族の芝居」であり、モーリス（サシャ・ギトリ）が恋人と結婚するのは、恋人を演じたのがイヴォンヌ・プランタンだったからである。

さて、スペイン風邪が猛威を振るう1919年に上演されたこの喜劇には、風邪への言及が見られる。第1幕、リュシアン演じるアドルフが年のわりに健康そうで、人生を楽しんでいる様子に、サシャ演じる息子のシャルルが「どんどん健康になっているようだ」と驚く。それに対し、アドルフは「この前、風邪を引いてから、生まれ変わったようだよ！人は10年毎に大病をするべきだと思うんだ。回復すれば、その後はより健康になっているから」（『私の父は正しかった』第1幕）と答えるのである。第1幕は1899年を舞台にしているため、スペイン風邪が話題になっているわけではないが、観客は風邪というキーワードが50歳を超えて元気なリュシアン・ギトリによって口にされた時、ただちに流行中の病のことを連想したに違いない。サシャは少なくともこの時点においては、スペイン風邪をむしろ笑いの対象としていたようである。

実は、スペイン風邪を笑いの対象とするような姿勢はサシャ・ギトリに限られたものではない。1818年から1819年にかけてフランスでは24万人がスペイン風邪で亡くなったが、スペイン風邪を笑い飛ばすシャンソンやカリカチュア、小話が多く現れていた。このような笑いは、得体の知れない疫病に、人々が立ち向かう手段の一つでもあった[23]。例えば1919年3月の雑誌『笑い』には次のような記事が出ていた。

> 繰り返すが、スペイン風邪は災禍である。私達は、身近な人や私達自身の心配をする。しかし、どんなに妥当なものであれ、正当なものであっても予防策をとることは恥ずかしく思ってしまう。

恐れているという様子をすることを、私達は恐れるのだ。【中略】

劇場では、役者たちは舞台にヴァンサン教授が要求する7重にしたモスリンのマスクをして登場すべきであろう。しかし、マスクは愛の場面では異様なものとなろう。抗菌マスクをして『接吻』が演じられたら、殺菌されすぎているように感じるだろう。

『笑い』1919年3月15日号

さて、周りの人の死だけが恐れるべきことであり、楽しめるときに人生を楽しまなければならないという教えには、スペイン風邪で周りの人々が死んでいった状況が反映されていた可能性はある。しかし、「人生を楽しむ」ということは病に苦しめられていたサシャの作品には一貫して現れるテーマであった。『夢を見ましょう』の「彼」が生きていることに喜びを感じる人物だったことを思い出したい。スペイン風邪の流行によって、サシャ作品に新たに導入された考えではない。

6　病・結婚・愛人

スペイン風邪当時のサシャ・ギトリの戯曲『パスツール』、『私の父は正しかった』において、当初の予想とは異なり、ほとんどスペイン風邪の影響が見られないことが判明した。サシャ作品においては、病は個人的な経験であり、社会的な出来事であるパンデミックは関与していないようだ。

サシャにおける個人的な経験である病は、この作者のもう一つの個人的テーマと結びつく。「結婚か、愛人か」もしくは「永遠か、瞬間か」という問題である。

『私の医者たち』で、サシャは自分の作品において、病がどのように現れているかを例示しているが、そこに先述した1916年の喜劇『ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ』の名前が挙がっている。あらすじは以下のようなものだ。サシャが演じるジャン・ド・ラ・フォンテーヌは、当時

の妻であるシャルロット・リゼスが演じるラ・フォンテーヌ夫人の不貞を目撃して、家を出る。やがて『寓話』で有名になったラ・フォンテーヌには多くの愛人ができるが、なかでも2番目の妻となるイヴォンヌ・プランタンが演じる歌手が愛人となっている。そこに不貞の相手が結婚し、取り残されたラ・フォンテーヌ夫人がやってくる。ラ・フォンテーヌは、夫人を妻として愛することはできないと言う。そうではなく、彼女を愛人として愛したいと言う。彼らはお互いに愛人同士のようにやり直すことを取り決めるが、そこに窓の外からラ・フォンテーヌの愛人の歌声が聞こえてくる・・・。サシャの前期の作品は現実と虚構が入り乱れる個人的な作品が多いが、この作品も歴史上の人物を題材にしてはいるものの、作者の生活が透かし彫りとなっている極めて個人的な作品であった。

この戯曲の頭にはジャン・ド・ラ・フォンテーヌの『寓話』からの引用が置かれている。

引用されているラ・フォンテーヌの作品は、イソップの「男と悪妻」をもととしているが[24]、イソップの原作とは異なるところがあった。イソップの原作では難しい性分の妻を持った男が、実家でも同じように振る舞うのかを知りたくなり、妻を里帰りさせる。男は戻ってきた妻にどのように迎えられたかを尋ねる。妻は牛飼と羊飼に睨まれたと答えた。男は「朝早く羊を追って出て夜遅く帰る人たちに憎まれたくらいだから、お前が一日中顔を合わせていた人たちのことは、推して知るべしだな」と返事をする。

ラ・フォンテーヌはここに次のように言葉を足している。

あなたがそんなにも喧嘩腰だから
一瞬しかあなたの近くにいない人でも、
夜、あなたが戻ってくるのを見ると、うんざりするのです。
一日中、あなたが荒れ狂っているのを見なければならない
下男たちはどうしたら良いというのでしょう？

昼も夜も、自分と一緒にいることをあなたは夫に望んでいます。
夫は何をすれば良いのでしょう？
村に戻ってください。さようなら。
もしあなたとまた会うとか、また会いたいと私が願うことがあるならば
罰として死者の国で
私の脇にあなたのような妻が二人いますように。
　ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ『寓話』第7巻寓話2

現世で妻とまた会うことはお断りだ。現世で妻と会いたいと思うことなどない。そんなことは、死者の国で妻のような女性が二人いることを望むようなものだと、ラ・フォンテーヌ版の男は言うのである。このラ・フォンテーヌの寓話をサシャは戯曲の頭で引用している。そして、サシャは、『ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ』という作品において、主人公に、自分の病は、まさに現世における二人目の妻であると言わせているのである。この作品ではラ・フォンテーヌはサシャと同じリウマチに苦しめられている。実際にはラ・フォンテーヌは晩年、肺炎に苦しんだのであり、リウマチではなかった。この作品のラ・フォンテーヌも限りなくサシャの姿と重ねられていたのだ。ラ・フォンテーヌ（＝サシャ）はリウマチについて、この病気で人は死ぬことはないが、治ることもないため、どこへ行ってもついてくる厄介な存在であると言う。厄介な点では、妻と同じではないか。

ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ：
考えてみると、妻に似ていますね。ええ、妻ですよ。もう一人別のね！　耐えがたいです。この妻には慣れるしかありません。一緒に暮らさなければいけないし、切っても切り離せない仲だからです。人を殺すことはありません。ただ、人をいらいらさせるし、害を与えるし、絶え間なく移動します。しかし、いつもいるんですよ。え

え、まったく妻ですね。もう一人別のね！　結婚ですら嫌だという男にとって、二人の妻がいるというのは不幸なことですよ！

サシャ・ギトリ『ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ』第4幕[25]

ラ・フォンテーヌ（＝サシャ）にとって、妻がいて、病にかかっている状況は、この世で二人の妻に囲まれるのと同じことであった。寓話の男は、決して望まない状況として、死者の国で妻のような女性2人に囲まれることを想定したが、ラ・フォンテーヌ（サシャ）はその状況を生きなければならないのだ。

勿論、5度結婚していることからも分かるようにサシャは結婚を全否定しているのではない。喜劇の伝統に従い、結婚で終わる作品も多くある。しかし、永遠か、瞬間かが問題となるとき、基本的に、彼の作品の登場人物は、瞬間（愛人）を選ぶ。そして、永遠（妻）を選んだ場合は、しばしば永遠（妻）を呪詛することになる。

1951年のブラック・ユーモア溢れる映画『厄介な女[26]』*La Poison* を取り上げておこう。« poison » はフランス語では通常、男性名詞で「毒」という意味を持つが、女性名詞として毒のように「厄介な女」を指す。この作品では「聖なる怪物」と呼ばれるに相応しい怪優ミシェル・シモン Michel Simon が主人公を演じているが、サシャは映画の冒頭で、ミシェル・シモンが19世紀の名優サラ・ベルナールやリュシアン・ギトリに並ぶ名優であると称えていた。この作品でミシェル・シモンは、田舎町で妻と30年間暮らしてき主人公ポールを演じる。男と妻はお互いに憎しみ合い、殺意をつのらせていく。妻は毒薬を購入し、毒薬をワインに仕込む。男のほうは弁護士に殺人を犯しても無罪になるにはどうしたらよいかを尋ねにいく。妻が男を毒殺しようとした日、男は妻を刺し殺してしまう。裁判になったとき、男は妻に永遠に縛られることに我慢がならなかったと証言する。

ポール：

あなたがたの世界では、女房に耐えられなくなったら、まず浮気しますよね。それから、離婚を申し込むって寸法だ。でも田舎ではね、違うんです。田舎では離婚できないんです。人生をやり直すためには、相手が死ぬのを待つしかないんです。ときには長いこと待たされるんですよ。【中略】

裁判官：
罪を犯したことを後悔していますか？

ポール：
それは判決しだいです。有罪になれば、それはもう後悔しますけれど。無罪ならば、するわけないじゃないですか！　ただ、もしあの女が怪我しただけで、もう治っていて、また一緒に暮らさなければいけないのなら、有罪にしてほしいですね。逆に、あの女を消すことができたのに、人生を少しも楽しむことができないというのならば、本当に残念なことです！
サシャ・ギトリ『厄介な女』[27]

ポールは裁判の結果、無罪となり、村に戻ってくる。殺人事件のおかげで村は有名になっている。バスが通り、観光客まで訪れるようになっていた。名所は「殺人のあった家」だ。ポールは今や村の名士であり、村人たちは彼の帰還を喜ぶ。

この作品はブラック・ユーモアに満ちているが、従来のサシャの作品と主張においてはなんら変わっていない。「永遠（結婚）」というのは、時に唾棄すべきものであり、どんな手段をつかっても排除しなければならないということである。そして、「病」と「結婚」が等号で結ばれるとき、サシャにおいては、「病」もまたどんな手段をつかっても排除しなければならない（しかし、排除することができない）存在となる。そして、『厄介な女』という作品が、まさに「病」と「結婚」を巡るもの

であったことは、冒頭から明らかにされていた。この作品は村の薬局の場面から始まるが、村人のほとんどが不眠症、下痢、便秘などの症状に苦しみ、薬局のお世話になっていた。特にポールは不眠症から睡眠薬を購入していたが、「あの妻ならば仕方ない」と言われているのだ。また、村の広場に置かれた銅像も村における「病」の存在を浮き彫りにしていた。ポールの事件と全く関係がなく、ただ一瞬挿入されただけかのように見える場面で、村人たちが広場の銅像を話題にして、「あれはパスツールの銅像だ」と話すのだ。この場面は物語には必要がないように思われる。しかし、サシャ作品の内在的論理に従えば、不可欠な場面であったということが理解されるだろう。

結び

100 年前に世界を襲ったスペイン風邪が、パリ演劇界にどのような影響を与えたのかという疑問から、当時の演劇界を代表する人物の一人にして、病に苦しみ続けたサシャ・ギトリを取り上げて調査することにした。しかし、スペイン風邪が大流行している中、上演されたサシャの芝居においては、『私の父は正しかった』に「この前、風邪を引いてから、生まれ変わったようだよ！　人は 10 年毎に大病をするべきだと思うんだ。回復すれば、その後はより健康になっているから」とスペイン風邪を笑い飛ばすセリフが一つあるのみであった。このような態度はサシャ一人に見られることではない。得体が知れない疫病に対して、笑いとばすことは精神的健康を保つために必要なことでもあった。いずれにしても、サシャ・ギトリ作品においてスペイン風邪についてはほとんど言及がなかったことは重要である。彼は、病に関して多くを書き残しているが、それらは全て彼の個人的な体験に基づくものであったからである。

そして、サシャ・ギトリにおける病について調査を進めると、それは永遠（結婚）か、瞬間（愛人）かというサシャの作品に繰り返し現れるもう一つの個人的な問題と結びつくことが判明した。サシャは結婚に

より永遠に縛られることを嫌い、瞬間（愛人）を選択し続けた。そのようなサシャ自身の傾向は、ナルシストと非難されることもあったサシャの作品群に強く現れている。一方でサシャが抱える病もまた永遠に続くものであった。そのため、結婚と病はサシャの作品では結びつく存在であったことが示された。実際、結婚と病の 2 つはサシャの実生活でも密接に結びつくものであった。3 番目の妻ジャクリーヌ・ドゥリュバックの証言によると、サシャは下腹部の皮膚の病が原因で不能となっていたのだ[28]。この証言が正しいものだとするならば、サシャは永遠を求めても決して永遠を得ることができなかったことになる。瞬間を求め続けるしかない。しかし、瞬間を求めるならば、永遠はより遠くなり、最後は排除すべきものと変わる。『厄介な女』ではブラック・ユーモアに隠されてはいたが、永遠のものである結婚（＝病）は排除すべき存在として現れていた。

サシャ・ギトリは、演劇人であるならば舞台中に倒れ、役者の化粧をしたまま死んだモリエールを羨まない人はいないだろうと言っていた。病に苦しめられ続けた彼は、晩年、多発性神経炎から両足が弱り、動けなくなっていった。彼は『パリ語りなば』の撮影中に倒れてしまい、翌日から車椅子で撮影を続けた。1957 年、『3 人で 1 組』*Les trois font la paire* では、プロローグの場面に鎮痛剤を打って登場し、観客に最後の挨拶をした。彼はこの映画公開の数週間後に 72 歳で亡くなった[29]。希望したようにサシャは、舞台中に病で倒れ、役者の化粧をしたままモリエールとほぼ同じ演劇人らしい死に方をしたと言える。また「病」と「結婚」との関係で言えば、5 番目にして最後の妻ラナ・マルコーニ Lana Marconi にサシャは「これまでの 4 人は私の妻だったが、あなたは私の寡婦となるだろう」と語っていた[30]。ラナ・マルコーニはこの予言通りに、サシャの死まで彼を捨てることはなかった。サシャの死は、彼の作品と同様に、また「病」と「結婚」の両方の要素を満たしたものであった。

サシャ・ギトリを通してスペイン風邪の中のパリ演劇界について調査しようという計画だったが、サシャにおける病が個人的な体験であったため、サシャの作品における病についての調査となった。しかし、これもまた当時のパリ演劇界の様相の一つである。スペイン風邪中のパリ演劇界については引き続き研究課題としたい。

注

1 Eric Smoodin, LA GRIPPE À PARIS: HOW PARIS RESPONDED TO THE 1918 INFLUENZA EPIDEMIC, https://dukeupress.wordpress.com/2020/03/18/la-grippe-a-paris-how-paris-responded-to-the-1918-influenza-epidemic-a-guest-post-by-eric-smoodin/ 2022/02/22 閲覧

2 パスツール研究所　https://zaidan.pasteur.jp/institut/index.html　2022/03/27 閲覧

3 Nejma Omari, De la grippe espagnole au Covid-19, ces remèdes qui promettent des miracles, https://gallica.bnf.fr/blog/06052020/de-la-grippe-espagnole-au-covid-19-ces-remedes-qui-promettent-des-miracles?mode=desktop　2022/03/27 閲覧

4 Sacha Guitry, *Théâtre je t'adore*, dans *Théâtre II*, Omnibus, 1996, pp. 54-55.

5 Sacha Guitry, *Deburau, Théâtre I*, Omnibus, 1991, p, 679.

6 サシャの生涯に関しては *Encyclopædia Universalis* の記事を参照した。Noël SIMSOLO, « GUITRY SACHA - (1885-1957) », *Encyclopædia Universalis* [en ligne], consulté le 6 mars 2022. URL : https://www.universalis.fr/encyclopedie/sacha-guitry/

7 サシャは自分が「私」（moi）の話しかしないという非難に答えて、1949 年に劇場版、映画版『トア』*Toâ* を公開している。Toâ は toi（君）と同じ音を持つ。

8 オーソン・ウェルズとは交流があり、サシャは自らが監督した映画 1953 年『ヴェルサイユ語りなば』*Si Versailles m'était conté…*、1955 年『ナポレオン』*Napoléon* に、オーソン・ウェルズに出演してもらっている。

9 Sacha Guitry, *Théâtre I*, p. 410.

10 *Ibid.*, p. 411.

11 *Ibid.*, p. 417.

12 Sacha Guitry, *Mes Médecins*, dans *Cinquante ans d'occupations*, Omnibus, 1993, p. 552.

13 *Ibid.*, p. 564.　数字の 3 を 8 に書き換えるという場面は、映画版『デジレ』*Désiré* で家政婦が家計簿をつけるときに再現されている。

14 *Ibid.*, p. 557.

15 エドモン・ロスタンにおける鳥については拙稿「外国文学講読：シラノの鼻は何故大きい？」『教養論集』第 18 号、成城大学法学会、2004 年、pp. 89-116 を参照

16 サシャ・ギトリが映画に本格的に参入する前の 1915 年（決定版は 1952 年）に公開したドキュメンタリー『私達の国の人々』*Ceux de chez nous* は、ロスタンだけではなく、19 世紀を代表する巨人たちである女優サラ・ベルナール、画家ドガ

Edgar Degas、画家モネ Claude Monet、画家ルノワール Auguste Renoir、彫刻家ロダン Auguste Rodin、作家アナトール・フランス Anatole France らの動く姿を観ることができ、貴重な映像資料ともなっている。

17 Sacha Guitry, *Lucien Guitry par son fils*, dans *Cinquante ans d'occupations*, Omnibus, 1993, pp. 683-684.

18 同様に 1938 年の映画『シャンゼリゼを遡ろう』*Remontons les Champs-Élysées* では、サシャはルイ 15 世を演じ、当時の妻ジャクリーヌ・ドゥリュバックがルイ 15 世の死を予言する占い師、4 番目の妻となるジュヌヴィエーヴ Geneviève Guitry がルイ 15 世の愛人の一人を演じている。

19 Sacha Guitry, *Toâ, Théâtre I*, p. 980.

20 Jean-Philippe Ségot, *C'était Sacha Guitry*, Fayard, 2009, pp. 76-79.

21 Sacha Guitry, *Pasteur, Théâtre II*, p. 145-147.

22 Sacha Guitry, *Mon père avait raison, Théâtre I*, p. 831.

23 Agnès Sandras, L'humour face aux épidémies – Partie II. Rire au moment où se conjuguent la Grande Guerre et la grippe dite espagnole (1918), https://histoirebnf.hypotheses.org/9234　2022/08/16 閲覧

24 イソップ「九五　男と悪妻」『イソップ寓話集』中務哲郎 (翻訳)　岩波文庫 1999 年

25 Sacha Guitry, *Jean de La Fontaine, Théâtre I*, p. 504.

26 この作品は『現金に手を出すな』*Touchez pas au grisbi*、『モンパルナスの灯』*Les Amants de Montparnasse*、『穴』*Le Trou* の名匠ジャック・ベッケル Jacques Becker 監督の息子ジャン・ベッケル Jean Becker 監督が 2001 年に『パラダイスの犯罪』*Un crime au Paradis* というタイトルでリメイクしている（日本未公開）。主演は『奇人たちの晩餐会』*Le Dîner de cons* で怪演を見せたジャック・ヴィルレ Jacques Villeret。

27 Sacha Guitry, *La Poison, Cinéma*, Omnibus, 1993, pp. 389-390.

28 Marc Lemonier, "Sacha Guitry", dans *Dictionnaire désolant du mariage*, Jourdan, 2020.

29 Jean-Philippe Ségot, *op. cit.*, pp. 437-441.

30 André Bernard, *Sacha Guitry : une vie de merveilles*, Presses de la Cité, 2006, p. 183.